

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18320098

研究課題名(和文) 複数文化接触領域としての中央アジアにおける宗教史の再構築

研究課題名(英文) Reconsidering the history of religion in Central Asia from the viewpoint of Multi-Cultural Contact.

研究代表者

稲葉 穰(INABA MINORU)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：60201935

研究成果の概要：文化接触、特にそこから生じる宗教文化の変容を、理論と歴史的事例の検討の両面を通じて考究した。具体的には、複数の宗教文化が接触、融合、衝突する領域において、いかなる文化変容が生じるのか、その結果として生じる宗教文化の重層性と多様性は社会にどのように影響を与えるのか、という問題設定を行い、歴史的中央アジアを舞台に、その社会的・政治的・経済的要因と、結果として生じた宗教表象の諸相を考察することを目指して研究を進め、国際学会の開催、成果刊行などの成果をおさめた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2007年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
2008年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
年度			
年度			
総計	16,600,000	4,980,000	21,580,000

研究分野：文化交流史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：中央アジア、南アジア、西アジア、宗教史、比較文化、文化接触

1. 研究開始当初の背景

21世紀の国際社会における宗教の役割の重要性は、単一の宗教史にとどまらない、世界的な、あるいは重層的な宗教史の検討と構築の必要性を高めている。他方、伝統的に宗教や、その周辺に形成されてきた「文化世界」「文化圏」の概念は、それぞれの「世界」「圏」の中心領域における動向の検討や、正統的宗教概念の考究とその展開の解明に主眼が置かれてきたが、近年、歴史研究や人類学研究

においては、そのような中心領域だけではなく、それぞれの「世界」同士が接合する縁辺地域において産み出されたダイナミックな変動と、その中心領域への波及、といった現象に研究関心が注がれるようになってきている。この、それぞれの「文化世界」の縁辺、別の言い方をすれば「複数文化接触領域」に視点を据えて宗教とそれを取り巻く文化現象を改めて考察し、新たな学際的研究領域へと踏み込むべく本研究は構想された。

2. 研究の目的

以上のような背景、問題意識から、本研究は、以下の目的を設定した。

(1) 複数文化の接触によって重層的に形成された宗教(文化)とその歴史に関する事例をとりあげ、その様相を解明することによって、現代のグローバリゼーションの中で新たに産み出されつつある多様な宗教と信仰を再考察し、近未来の宗教のゆくえをも視野にいった新たな宗教史研究を構想する第一歩とすること。

(2) 従来の研究の中で周縁的、非正統的とみなされてきた、縁辺部の宗教文化のあり方を扱うことによって、「イスラーム世界」「インド世界」「中華世界」など、宗教文化を核に想定されてきた文化世界単位を相対化し、新たな枠組みを提示すること。

(3) 複数文化接触領域の文化現象を考察する枠組みをどうにか提示し、それによって他地域、他時代の事例を照射するために用いるモデルを提示すること。

(4) 以上の研究活動を総括するため、最終年度に国際会議を複数組織し、その成果を報告論文集として出版する。

3. 研究の方法

上述のような目的に応じて、大きく三つのアプローチが設定された。

(1) 歴史的に長く複数文化接触の場として機能してきた中央アジア地域をフィールドとし、時代としては東西の文化が初めて本格的に異文化世界へと及んだ西暦 7-10 世紀という時代枠を設定して、中国語、アラビア語、ペルシア語、ソグド語、バクトリア語、チベット語、など多様な文献資料の探査、精査、および近年の考古学調査成果の利用を通じ、当該地域、時代における文化接触とその結果を探る。

(2) 過去の文献、出土物の探査はしかしながら、特定の宗教文化の全体像を構成するには不十分であるため、宗教人類学的アプローチを用い、現地フィールドワークを含めた、近現代の各社会における水平方向および垂直方向の文化接触と宗教変容に関する研究を同時に行い、それを他地域の事例を検討するためのフレームワークとして用いる

(3) 文献、考古資料と、人類学的アプローチの比較および総合を試みる。

4. 研究成果

それぞれのアプローチ毎に以下のような成果をおさめた。

まず、中央アジア宗教史の歴史的研究については、現地調査や欧米の図書館、文書館の調査を実行し、次項の業績リストにあるような研究を発表するとともに、最終年度に、次の二つの国際学会、研究集会を開催した。

(1) 国際学会 Afghanistan Meeting 2008: Reconsidering Material and Literary Sources on the 6th to the 9th Century (2008 年 10 月 1 日~4 日 於京都大学人文科学研究所)

本研究の研究代表者である稲葉が主宰し、国外から 7 名(ウィーン大学教授 Deborah Klimburg-Salter、オーストリア国立芸術史博物館主任学芸員 Michael Alram、ナポリ東洋大学名誉教授 Giovanni Verardi、ウィーン大学芸術史研究所講師 Anna Filigenzi、メトロポリタン美術館学芸員 Kurt Behrendt、ドレクセル大学准教授 Pia Brancaccio、ウィーン大学研究員 Erika Forte)、国内から 1 名(京都大学名誉教授桑山正進)の当該地域の歴史、考古学、美術史に関わる著名な専門家を招聘して、最新の研究成果を報告するとともに、30 名を越える出席者も交えた討論を行った。学会の成果は論文集 Afghanistan and Northwest India from the 6th to the 9th Century (仮題)として、ウィーン大学より刊行される予定である。

(2) 国際ワークショップ「多民族的敦煌」(2009 年 1 月 24 日 於京都大学人文科学研究所漢字情報研究センター)

研究分担者高田時雄教授主催により、中国から敦煌研究を代表する二名の研究者(北京大学教授榮新江、蘭州大学教授鄭炳林)を招き、特に、中世敦煌社会における文化・言語の多様性と重層性に関わる報告と討論を行った。その成果は『敦煌写本研究年報』第三号(2009 年 4 月 京都大学人文科学研究所)に掲載された。

一方、宗教人類学的研究については、研究分担者田中雅一教授が主催する共同研究「複数文化接触領域の人文学」を舞台に、毎月二回のペースで研究発表と議論が交わされた。特に、現代社会における宗教変容が極めて速いスピードでしかも多方向に向けて起きていること、その背景として異なる宗教文化との接触と対立の一方で、対立のための自己変容が生じるという過程が浮き彫りにされたこと、あるいは、近代アジア社会において、政治や経済と分離した形での「宗教圏」が、人々の生活空間の中に形成されていった過程の詳細な分析についての研究は、目的にかかげたところの、他地域、他時代の事例を考察するためのモデルを提供しうるものであった。この共同研究における研究成果は、年報『コンタクト・ゾーン』(京都大学人文科学研究所人文学国際研究センター刊)誌上に随時、公表されている。

第三の目的であった文献・考古資料に基づく研究と、人類学的アプローチの統合についても、上掲の研究成果の中にその萌芽が見ら

れると考える。宗教史研究の新しいモデルについては、今後さらなる事例の検討を通じて、より明確な形で形成できると期待している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 13 件)

①稲葉稔、ヤカウラングとリバーテ・カルヴァーン—ハザーラジャート北部の歴史地理、『オリエント』、査読有、50 巻 1 号、2007 年、53-79 頁

②田中雅一、身内で結婚するスリランカ・タミル漁村における婚姻をめぐる、『社会人類学年報』、査読有、32 号、2006 年、1-29 頁

③高田時雄、敦煌遺書與漢語史研究、『敦煌研究』、査読有、2006 年 6 号、2006 年、136-138 頁

④Takata, Tokio, A Note on the Lijiang Tibetan Inscription, *Asia Major*, vol. 19(1-2), 査読有, 2006, pp. 161-170.

⑤Okuyama, Naoki, The Tibet Fever among Japanese Buddhists of the Meiji Era, In: M. Esposito (ed.), *L'images du Tibet aux XIXème-XXème siècles*, EFEO, 査読有, 2007, pp. 3-19.

⑥ Funayama, Toru, Masquerading as Translation: Examples of Chinese Lectures by Indian Scholar-Monk, *Asia Major*, vol. 19(1-2), 査読有, 2006, pp. 39-55.

⑦高田時雄、金階理傳略、『日本東方学』、査読有、1 号、2007、260-276 頁

⑧船山徹、「如是我聞」か「如是我聞一時」か—六朝隋唐の「如是我聞」解釈史への新視角、『法鼓仏学学報』、査読有、1 号、2007 年、241-275 頁

⑨真下裕之、イスラーム化の史実と伝説：南アジアにおけるイスラーム信仰戦士、共生倫理研究会編『共生の人文学』、神戸大学、査読無、2008 年、190-214 頁

⑩Tanaka, Masakazu, Marrying Within: A case from a Tamil Fishing Village in Sri Lanka, *International Journal of South Asian Studies*, vol. 1, 査読有, 2008, pp. 77-100.

⑪Tanaka, Masakazu, The Indian Community in Kobe: Diasporic Identity and Network, In: K. Kesavapany, A. Mani & P. Ramasamy (eds.), *Rising India and Communities in East Asia*, 査読無, Institute of Southeast Asian Studies, 2008, pp. ?-?

⑫高田時雄、京都興聖寺現存最古の《大唐西域記》抄本、『敦煌研究』、査読有、2 号、2008 年、47-48 頁

⑬船山徹、異香ということ—聖者の体が発す

る香り、『アジア遊学』、査読無、110 号、2008 年、18-26 頁

[学会発表] (計 7 件)

①Inaba, Minoru, Between the East and the West: the Pre-Islamic History of Afghanistan, Lecture of the Department of Asian Studies, 2007年5月24日, ローマ大学 (イタリア)

②Inaba, Minoru, Xuanzang, Huichao and Wukong: Records of Chinese Pilgrims on the Buddhist Kingdoms of Afghanistan, at: Conferenze del Centro Studi sul Buddhismo, 2007 年 5 月 30 日, ナポリ東洋大学 (イタリア)

③船山徹、ナーランダーの学術仏教とカマラシーラの認識論、第 53 回東方学会議、2008 年 5 月 24 日、京都市国際交流会館

④Funayama, Toru, Two Recensions of the Fanwang jing and the Significance of a Tang Version in the Fangshan Stone Sutras, at: Buddhist Epigraphy in China: State of the Field and New Methodologies, 2008 年 7 月 6 日, ハイデルベルク大学 (ドイツ)

⑤ Inaba, Minoru, Fromo Kesarō the Kabulshah and Central Asia, at: Afghanistan Meeting 2008: Reconsidering Material and Literary Sources on the 6th to the 9th Century, 2008 年 10 月 2 日, 京都大学

⑥Inaba, Minoru, Nezak in Chinese Sources?, at: Iranian Huns and Western Turks: Archaeology - History - Art History - Numismatics, 2008 年 11 月 18 日, オーストラリア国立芸術史博物館

⑦真下裕之、インド洋海域史における海港都市：17 世紀前半におけるインド西海岸の海港都市スーラトの側面、2008 年 11 月 27 日、韓国海洋大学校 (釜山)

[図書] (計 5 件)

①田中雅一、世界思想社、ミクロ人類学の世界、2006 年、466 頁

②稲葉稔 (共著)、山川出版社、南アジア史 2 (世界歴史大系)、2007 年、63-101 頁

③稲葉稔・高田時雄・船山徹 (共著)、京都大学人文科学研究所、シルクロード発掘 70 年—雲崗石窟からガンダーラまで、2008 年、90-91、94-95、100-101 頁

④船山徹、宗教情報センター、涅槃経の来た道—曇無讖伝、2008 年、79 頁

⑤田中雅一 (編著)、京都大学学術出版会、フェティシズム研究 I—フェティシズム論の系譜と展望、2009 年、377 頁

〔その他〕

京都大学人文科学研究所所蔵バーミヤーン
石窟写真ウェブ・データベース
(<http://kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~afghan/bamiyan/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲葉 穰 (INABA MINORU)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：60201935

(2) 研究分担者

田中 雅一 (TANAKA MASAKAZU)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：00188335
高田 時雄 (TAKATA TOKIO)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：60150249
藤井 正人 (FUJII MASATO)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：50183926
船山 徹 (FUNAYAMA TORU)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：70209154

(3) 連携研究者

奥山 直司 (OKUYAMA NAOJI)
高野山大学・文学部・教授
研究者番号：50177193
真下 裕之 (MASHITA HIROYUKI)
神戸大学・文学部・准教授
研究者番号：70303899